

approach”, *Linguistic Analysis*, Vol. 38, No.3-4, 331-355 (平成25 (2013)年11月)

共著論文

1. (Hisao Tokizaki, Yoshihito Dobashi) “Introduction to Universal Syntax and Parametric Phonology”, *Linguistic Analysis*, Vol. 38, No.3-4, 147-151. (平成25 (2013)年11月)

口頭発表

1. 共同 (Changguk Yim, Yoshihito Dobashi) “Recursive i-phrasing and yo-particle in Korean: A derivational approach”, 9th Workshop on Altaic Formal Linguistics, Cornell University, Ithaca, NY. (平成25年 (2013)年8月)

新たな「公共圏」モデルの構築

研究代表者 渡 邊 登

1. 分担者名 (人文学部の教員〈現社研主担当を含む〉)

佐 藤 康 行
原 田 健 一
中 村 潔
松 井 克 浩
古 賀 豊
杉 原 名穂子
中 村 隆
北 村 順 生

2. 研究活動の概要

本研究プロジェクトは、高度情報化、メディアテクノロジーのグローバルな拡大のもとで、現実の地域社会におけるコミュニケーションが多層的・複合的な「公共圏」を形成するための諸条件の検討を課題としている。

2013年度は2012年度に引き続き、研究メンバーが各々ないし複数で個々の専門領域から具体的なフィールドへのアプローチによる調査研究を行うとともに、その成果等を研究会を開催して確認するとともに、ゲスト発表者による公開研究会も行った。

(1) 調査研究

例えば「バリ＝ヒンドゥー教徒の社会における「空間の圧縮」とその帰結」(科学研究費基盤(C)(研究課題番号：24520910; 研究代表者：中村潔))に関する現地調査(インドネシア共和国バリ州およびNTB州)や、原発立地地域である柏崎市・刈羽村を対象としたポスト福島第一原発事故における地域コミュニティの持続的「発展」「再生」の可能性を探る事例調査とともに、日本と同様に従来から積極的な原発推進路線をとる韓国においてポストフクイチ後に持続可能な地域社会への転換に向けた取り組みを進めつつある地域事例(ソウル市、順天市等)との比較研究(トヨタ財団2012年度研究助成プログラム「ポスト福島第一原発事故における地域コミュニティの持続的「発展」「再生」の可能性」研究代表者：渡邊登)、東北タイ農村の住民組織活動調査(ソーシャルキャピタルの観点からその可能性を検討)、また福島第一原発事故避難者へのインタビュー調査に基づく地域の復興・再生の諸条件を探る調査研究等が挙げられる。

なお、以上の調査研究は著書、論文等として成果を発表している6. 研究成果の一覧を参照のこと。

また、上記に加えて昨年度に引き続き、本研究プロジェクトのメンバー(原田健一、北村順生、古賀豊、中村隆志)が主体となって、映像資料の発掘、調査のみならず、新たな地域に根ざした映像の製作、さらにはそれらの映像の公開、閲覧ができる仕組みづくりを目指した、地域社会と連携した実践的な研究プロジェクトとして、研究プロジェクト「地域文化に関するコミュニ

ルな映像アーカイブ情報の構築と情報発信」に取り組んでいる。

(2) 研究会

本年度は以下の研究会を開催した。

◆第1回

発表者：青木恵理子氏（龍谷大）

発表題目：「選挙と祖霊とキリスト教：東部インドネシア・フローレス島山岳部の事例から」

日時：2013年4月12日（金）16：00－

場所：新潟大学総合教育研究棟F678

◆第2回

発表者：Adam Acar氏（Kobe City University of Foreign Studies）

発表題目：「日本におけるソーシャルメディアの現状について」

日時：2013年5月20日

場所：新潟大学総合教育研究棟D棟会議室

◆第3回

発表者：飯島康夫氏（新潟大学）

発表題目：灌漑水の分配をめぐる慣行と組織

日時：2013年12月18日（水）16：30－18：00

場所：総合教育研究棟F678

◆第4回

発表者：佐藤康行氏（新潟大学）

発表題目：「変貌するタイ農村における村落保健ボランティアの新しい役割：スリン県チョンプラ郡ムアンリン区ルワンウドム村の事例」

日時：2014年2月18日（火）16：30－18：00

場所：総合教育研究棟F678

3. 研究成果の概要と今後の課題

本プロジェクトでは既述したように、それぞれが個別のフィールド（日本、韓国、インドネシア、タイ等）を対象に、震災被害と復興問題、高齢化問題、

環境問題、男女平等等々の具体的課題の分析に基づいて公共圏モデルの解明を目指して研究を進めてきており、本研究は公共圏モデルの仮説的提示にとどまらない、社会提言を視野に据えた研究でもある。ここでの社会提言とは、日本学術振興会「人文社会科学振興プロジェクト研究事業」が提唱する「プロジェクト研究の成果を社会への提言として発信し、現代的諸問題の解決に貢献する」ことを指す。ただし、個別フィールドでの具体的課題分析にとどまっており、上記の目標は中期的な重要な課題となる。

4. 研究成果

(著書)

- ・中村隆志『恋愛ドラマとケータイ』青弓社、2014

(論文)

- ・中村隆志「ときめきの波—恋愛ドラマとケータイの歴史」、中村隆志編著『恋愛ドラマとケータイ』青弓社、2014
- ・中村隆志「恋愛のコンテンツとケータイ」、中村隆志編著『恋愛ドラマとケータイ』青弓社、2014
- ・松井克浩「新潟県における広域避難者の現状と支援」『社会学年報』42号、61-71頁、2013年.
- ・松井克浩「災害からの復興と「感情」のゆくえ—原発避難の事例を手がかりに」栗原隆編『感性学—触れ合う心・感じる身体』東北大学出版会、2014年.
- ・渡邊登「地域社会における意思決定手段としての住民投票志向の背景—韓国全羅北道扶安郡住民意識調査の検討から—」『人文科学研究』第134号、2014年

(口頭発表)

- ・松井克浩「災害後の地域のつながりと“こころの問題”」(新潟PTSD対策専門研修会「こころを大切にすること～被災者のこころの回復を願って 中越から東北へ～」講演、2013年8月、新潟ユニゾンプラザ)
- ・松井克浩「「故郷」の喪失と再生」(東北大学グローバル安全学トップリーダー

育成プログラム「災害と社会変動―安全・安心に生きるために」講演，2013年11月，東北大学)

- ・中村潔「バリ社会研究の現状と課題」(東北大学 長谷部弘科研 2013年8月11日新潟駅前「駅前オフィス」ミーティングルーム)
- ・中村潔「エージェンシーの定立と作用」に関わる研究計画(京都大学 杉島敬志「エージェンシーの定立と作用」研究会2014年1月10日国立民族学博物館4階第1演習室)

文化史・文化理論の再構築 2013年度活動

研究代表者 三 浦 淳

1. プロジェクト内容概略

「特にこういう方面を重点的にやろう」と決めてかかるのではなく、別の言い方をするなら拘束性を前面に押し出すのではなく、参加者の自主的な研究を軸として進めているプロジェクトですが、2013年度もそうした自主性が対象地域や時代、さらにはジャンルの多様性に結びつき、豊穡な結果を生み出しているように思われます。

ジャンルでは、まず映画・絵画・写真といった視覚重視の分野での論文や口頭発表が目につきますが、その時代や地域はさまざまであり、海外の産物を取り上げたものもある一方で、新潟という地域性を重視した研究でも着実な成果が積み重ねられています。また文学と視覚の連関に迫った業績には、既存の枠組に縛られないという、本プロジェクトの志向性が明確に表れていると言えます。

さらにはフランス百科全書派、ロシア演劇理論、ドストエフスキー、18-20世紀ドイツ文学など、広い意味での文学や思想に関わる問題が追究されており、過去の文化的遺産を新たな目で捉え直した上で未来に進んでいこうとする